第1章　美作市の成り立ち

美作市の現在を知るうえで、自然的・地理的環境、歴史的変遷、社会的状況を踏まえる必要があります。本章では、下記の内容で構成しています。

1.自然的・地理的環境

本市での生活に大きな影響を与え、現在の美作市を形づけた気候、地質などの風土について記載します。

2.社会的状況

現在の本市内の人々の営みについて、人口、土地利用、商工業、農業などについて記載します。

3.歴史的変遷

本市における人々の営みがどのように変遷し、現在に至るか概要を記載します。

1-1　自然的･地理的環境

(1)位置

美作市は、中国地方の東部、岡山県の北東部に位置し、瀬戸内海海岸線から約３５km、日本海海岸線から約６０kmに位置します。現在の市域は、平成１７(2005)年の勝田町、東粟倉村、大原町、作東町、美作町、英田町の６か町村の市町村合併によるものです。北は西粟倉村、鳥取県智頭町、東は兵庫県宍粟市、佐用町、南は備前市、和気町、西は奈義町、勝央町、美咲町と接しています。県庁所在地である岡山市からは、直線距離で約４３ｋｍ離れていますが、国道３７４線と美作岡山道路で容易に行き来することができます。また中国自動車道(中国縦貫自動車道)と鳥取自動車道(中国横断自動車道)やＪＲ姫新線、智頭急行などにより京阪神と九州及び山陰を結ぶ動脈の中継点となっています。

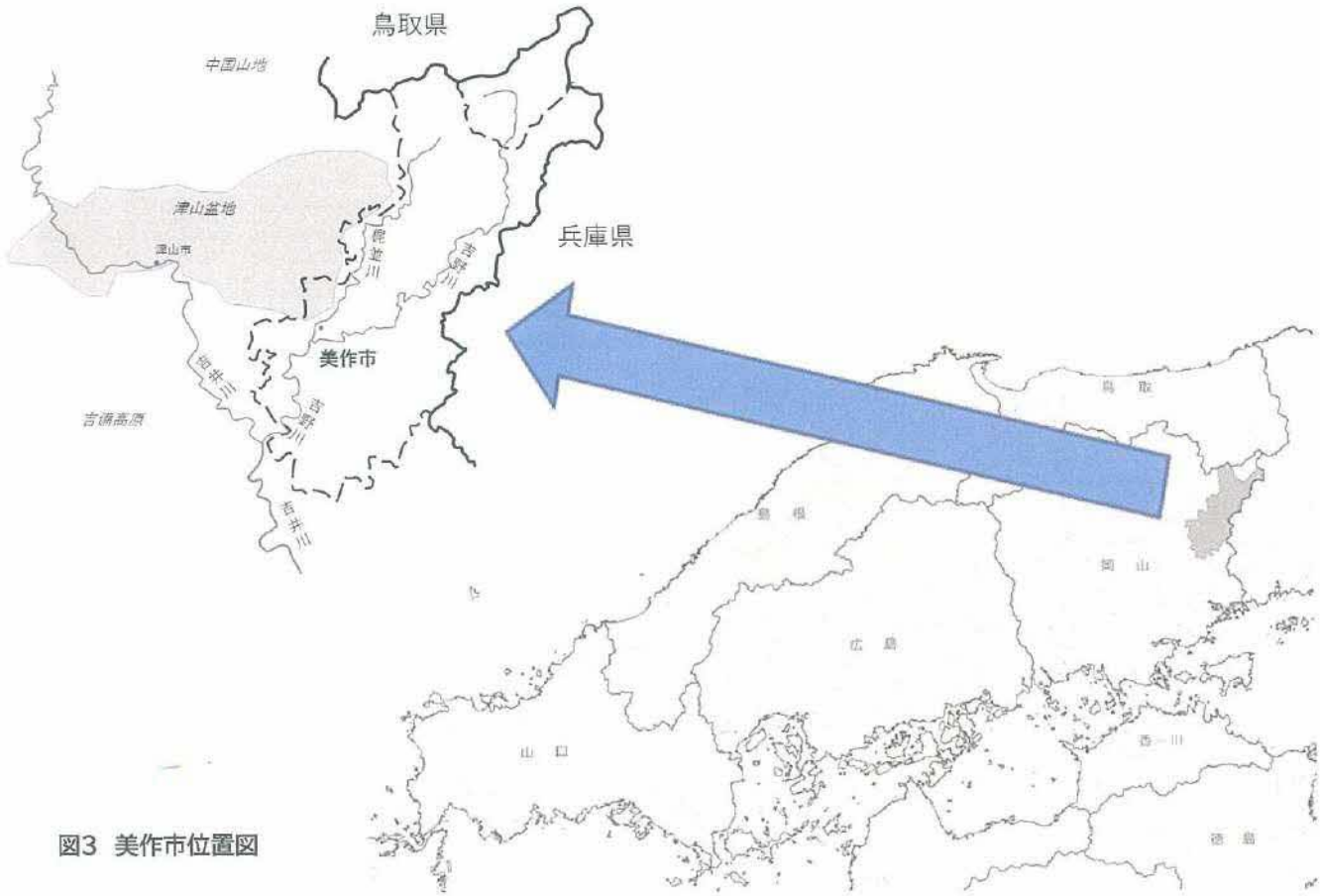


図3　美作市位置図

（2）市内地図

本計画で用いる地域区分（旧町域）大字位置は下記のとおりです。

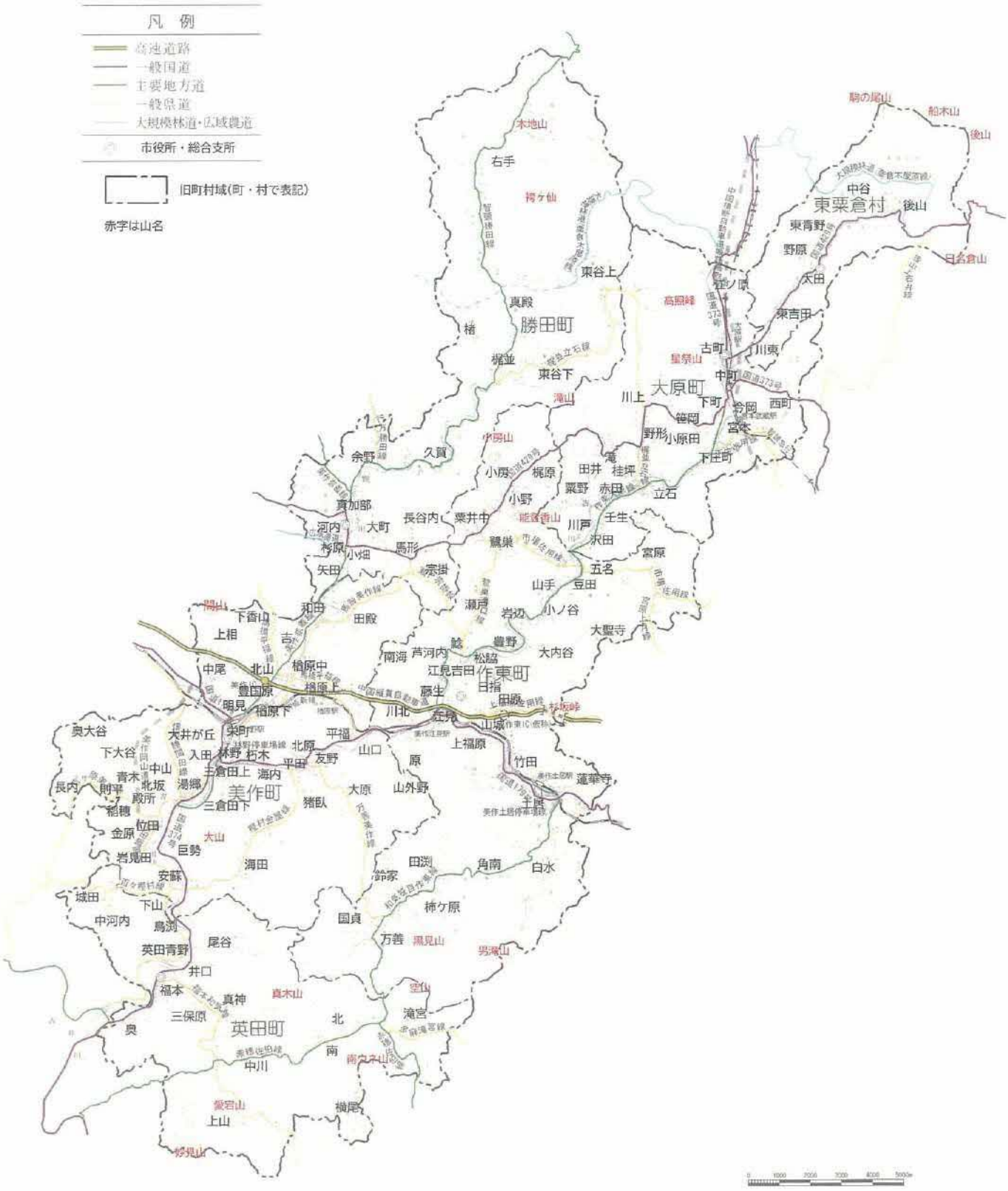
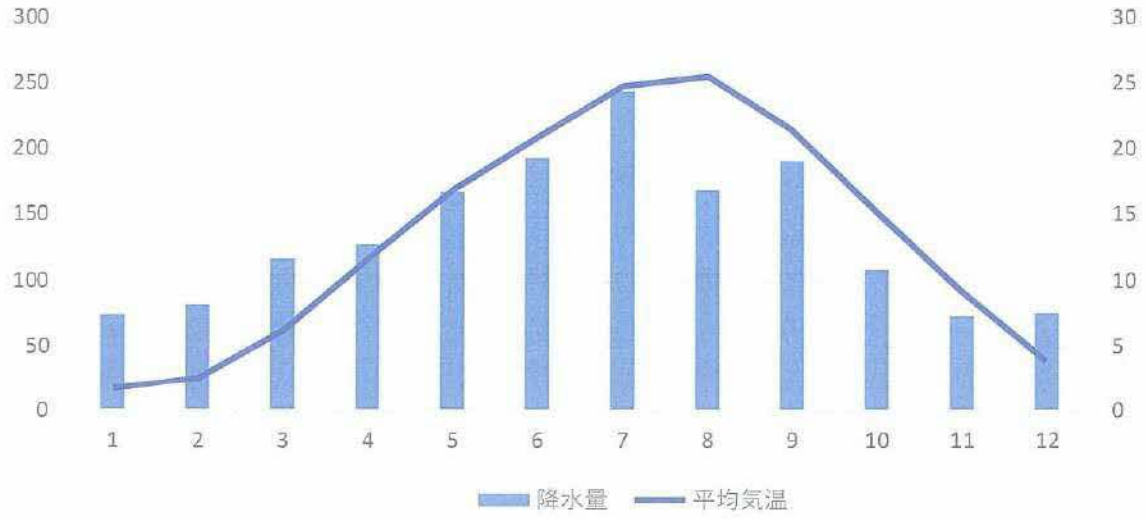


図4　美作市内の大字図

（３）気象

美作市の年間降水量の平均値は約１，６０９mm(気象庁美作市今岡アメダス観測地点:1991年～2021年)であり、日本国内の平均値(１，６００mm:気象庁)とほぼ同じです。また、月最低気温の平年値は１月の４．４℃で、最高気温は８月の２５．４℃の山形を示し(表２)、日本の気候区分では「瀬戸内型」の地域にあたりますが、８月の岡山市の月平均気温(約２８℃)と比べるとやや涼しい地域になります。１２月から２月にかけては降雪が見られ、平成２３(2011)年１月の降雪深合計は１３３ｃｍを記録しました。美作市は中国山地脊梁部の南側に位置し、後山(うしろやま)の東側(兵庫県宍粟市)には、ちくさ高原スキー場があることなどから、市の北部地域では、実際には今岡アメダス地点の統計値よりも多くの降雪があることが予想されます。降水量の月平均値のピークは７月で約２４３mmであり、これも岡山市の７月の平均値(約１７６mm)よりも多くなっています。

表2 アメダス観測所(美作市今岡)における降水量・平均気温の平年値(1991～2021)(出典:気象庁HP)



（４）地形

美作市の地形の概要を、国土地理院(2000)の標高データを用いて、美作市を３Ｄ立体地形図で示します(図５)。美作市は、中国山地の南側にあり、吉備高原と津山盆地の東縁に位置しています。これらを浸食する吉井川水系の吉井川と梶並(かじなみ)川が流れ、それら河川に沿って盆地状の平地が分布します。

①市域北部

中国山地は、鳥取県との県境、西粟倉村との境界付近の山地で、岡山県内で最も標高が高い後山(標高１，３４４．４m)をはじめとして、駒の尾山(こまのおやま)(１，２８０．５m)、木地山(きじやま)(９０７．６m)、袴ヶ仙(はかまがせん)(９３０．４m)など、標高が９００mを超える山が連なり、美作アルプスと呼ばれています(図５)。梶並川上流の鳥取県との県境は、中国山地の脊梁部の一角をなし、標高６３０m～１，０００mの山が連なりますが、国土地理院の地形図には山名が付された山頂がありません。ここから、標高１，０００mを超える峰々が東へ連なり、氷ノ山(ひょうのせん)や那岐山(なぎさん)と共に中国山地の脊梁部を成しています。この脊梁部から南に向かって高度を減じ、大原の西方には標高６００m前後の高照峰(こうしょうぼう)や、星祭山(ほしまつりやま)、滝山(たきやま)、小房山(おふさやま)などがあります。

②市域南部

南部の吉備高原地域は、標高約３５０m～５００mの起伏が小さな山地が展開します。この地域で最も標高が高いのは、南東部の和気町との境にある妙見山(みょうけんざん)(５１８．９m)で、他には南ウネ山(４７０．８

m)、空山(４３２．５m)、男滝山(４４６．１m)などがあります。この地域の地質は白亜紀後期(約８千万年前)の流紋岩質の凝灰岩で構成されていますが、一般に堅硬で高原を切る川沿いから、比較的急な斜面をなす山地となり、上部は緩やかな高原面となっています。このような断面形のため、山麓部の流れは滝となっているところがあり、滝宮神社奥の“琴弾の滝”や、長福寺の奥の“千早の滝”などがあります。

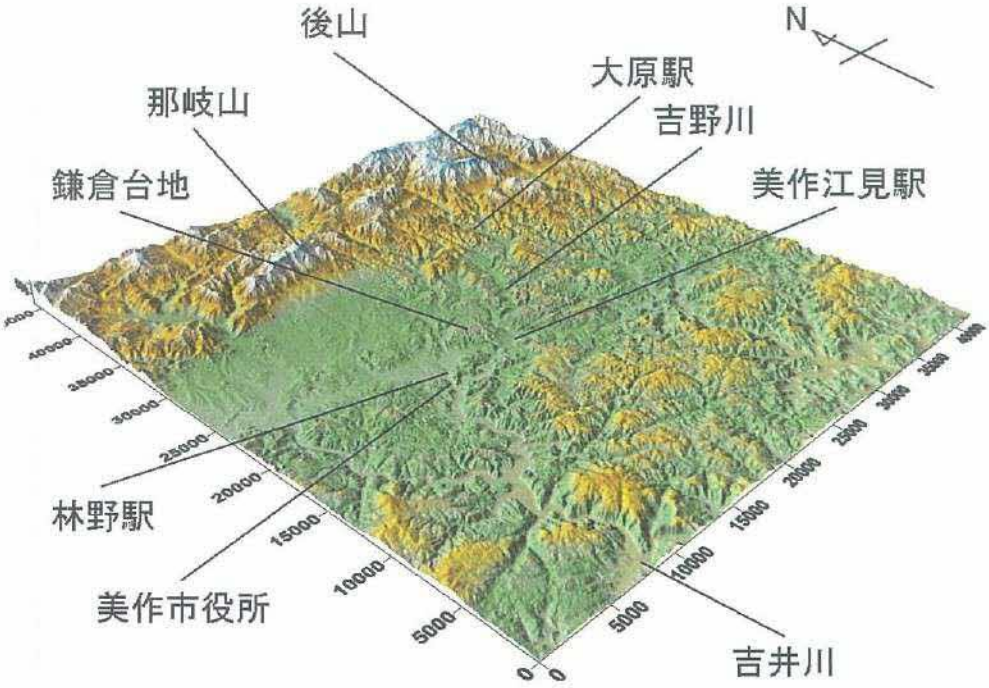


図5 美作市立体地形図

③市域中央部

中国山地と吉備高原に挟まれた本地域の中央部の林野から江見、さらには大原にかけての地域は、標高約２５０m～３５０mの丘陵地形が展開しています。林野近辺の丘陵上部には、中新世の堆積層が見られ、津山盆地から続く沈降帯の一部と認識されます。江見付近では、小規模ながら河岸段丘が認識されています(図７:地質図凡例D参照)。

美作市内には、まとまった平野はなく、河川沿いに細長く盆地が点在します。その中で最も広いのは、林野の北東に広がる部分ではありますが、その他には作東・江見付近や大原付近など、河川が合流するところに平地が形成され、各地域の中心となっています。林野の市街地の北側には鎌倉台地と呼ばれる標高１００m程度のなだらかな台地・丘陵状地帯が見られます。

④大原断層

美作市における、その他の特徴的な地形としては、断層に起因する地形があります。市域南部の愛宕山と南ウネ山の間に直線状の細長い谷がほぼ東西に延びていますが、これは地質時代の古い断層が差別的浸食で掘り起こされてできた谷で断層線谷です。もう一つは大原付近を通過する活断層「大原断層」による地形です。大原断層は、兵庫県中部から北西に延びる山崎断層の一部であり、確実度Ⅰ(５段階の最高ランク)、最新の活動は貞観１０(868)年の播磨・山城地震(M７)とされています(産総研:活断層データベース)。大原西方では、分離丘陵、河川の屈曲、三角末端面などの明瞭な断層地形がみられ、数百mにも及ぶ左横ずれの移動が確認できます(図６)。また、吉野川と後山川の合流点付近では、トレンチ調査の結果などから、大原断層の横ずれに伴う基盤の沈降が示唆されており(岡山県、H７)、大原付近の平坦な盆地の形成にも大原断層が関与している可能性が高いです。

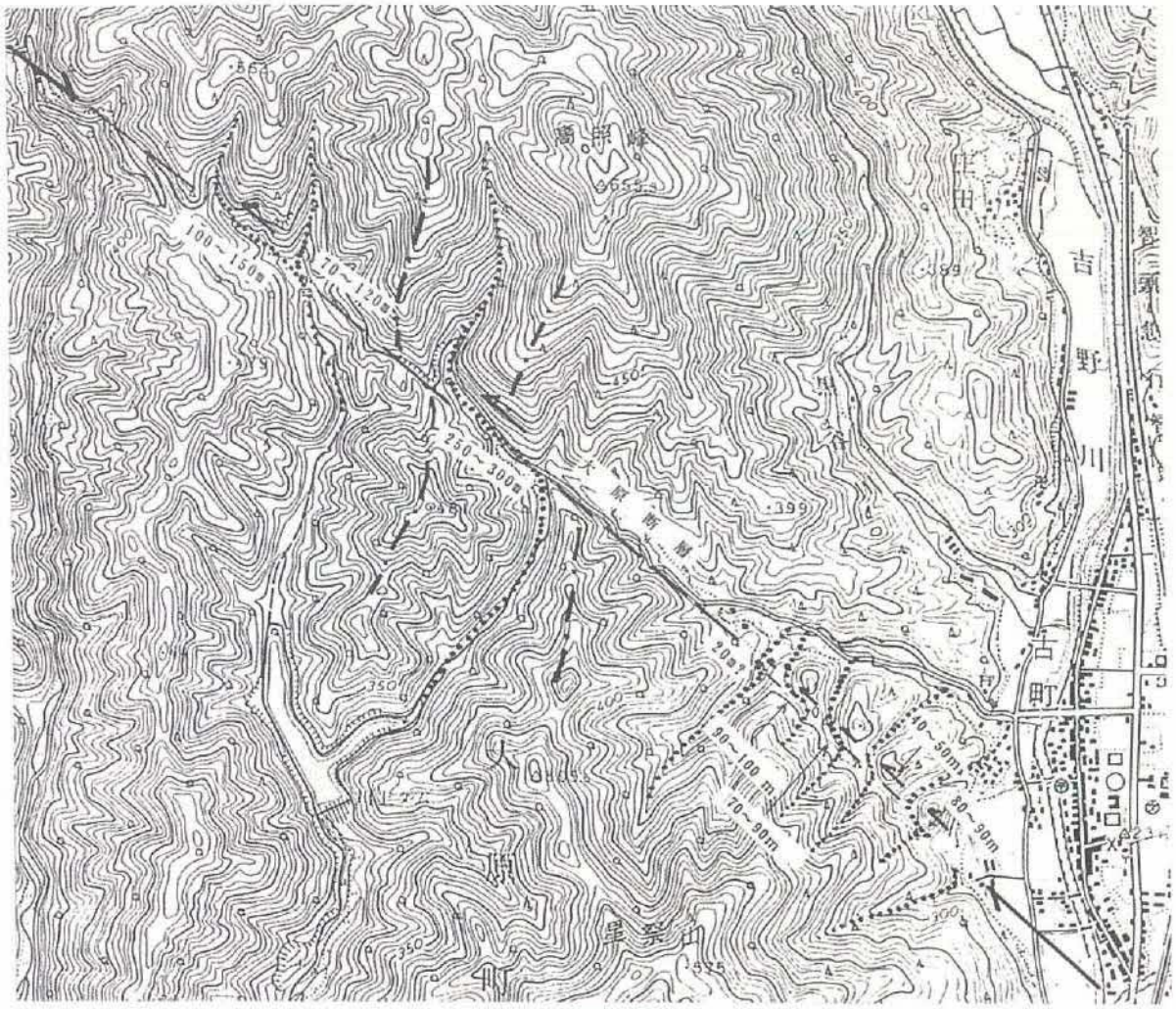


図6 大原断層地図

(5)地質

①市内最古の地質

美作市には、古生代の基盤岩類から第四紀の堆積層まで、様々な時代の各種の地質があり、非常に複雑な様相を呈しています。美作市の地質図(図７)に従うと、最も古い地質は、古生代ペルム紀のもので、斑レイ岩を主体とし一部が蛇紋岩化した地質(図７凡例:Ｇｂ)と、斑レイ岩よりも珪酸塩(ＳｉＯ２成分)に乏しいかんらん岩類で、全体が蛇紋岩化しているもの(Ｓ)、斑レイ岩の生成に関連して形成された花こう岩質のもの(Ｇｐ)、分布は小規模にとどまっていますが、以上の斑レイ岩類と同時期の地層がその後の中生代三畳紀に変成したもの(Ｍｔ)、さらに、ほとんど変成を受けていない砂岩や泥岩を主体とする堆積岩(Ｐｒ)です。これらのうち、前記Ｇｂ、Ｓ、Ｇｐは、夜久野(やくの)複合岩類と呼ばれる地質体の一部で、これらは海洋プレートの断片が変成したものであり、まとめて舞鶴帯と呼ばれる西南日本岩類の一部です。Ｐｒは海溝などに堆積した地層が、ユーラシア大陸の縁辺に付加した付加体で、超丹波帯と呼ばれ、これも西南日本の主要な基盤岩類のひとつです。美作市の南東部には地質図凡例Ｔの三畳紀の堆積物があり、舞鶴帯の地層を不整合で覆っています。これも舞鶴帯を構成する地質の一部とされており、貝などの化石から三畳紀の初め頃(２億５千万年前～２億４千万年前)の陸棚の地層と解釈されています。

以上の基盤岩類の上には白亜紀後期(約８千万年前)から古第三紀の初め頃(約５千万年前)の、火山に関連した岩石(Ｖｒ、Ｖａ、Ｖｂ、Ｄｐ)やこれらの活動期の堆積岩(Ｖｓ)、および、マグマが地表に達せず地下深くで固まった深成岩類(Ｇｙ、Ｇｉ、Ｇ)があります。Ｖｒは美作市内の各地に出現しています。特に南部の吉備高原地域にはまとまった岩体が見られ

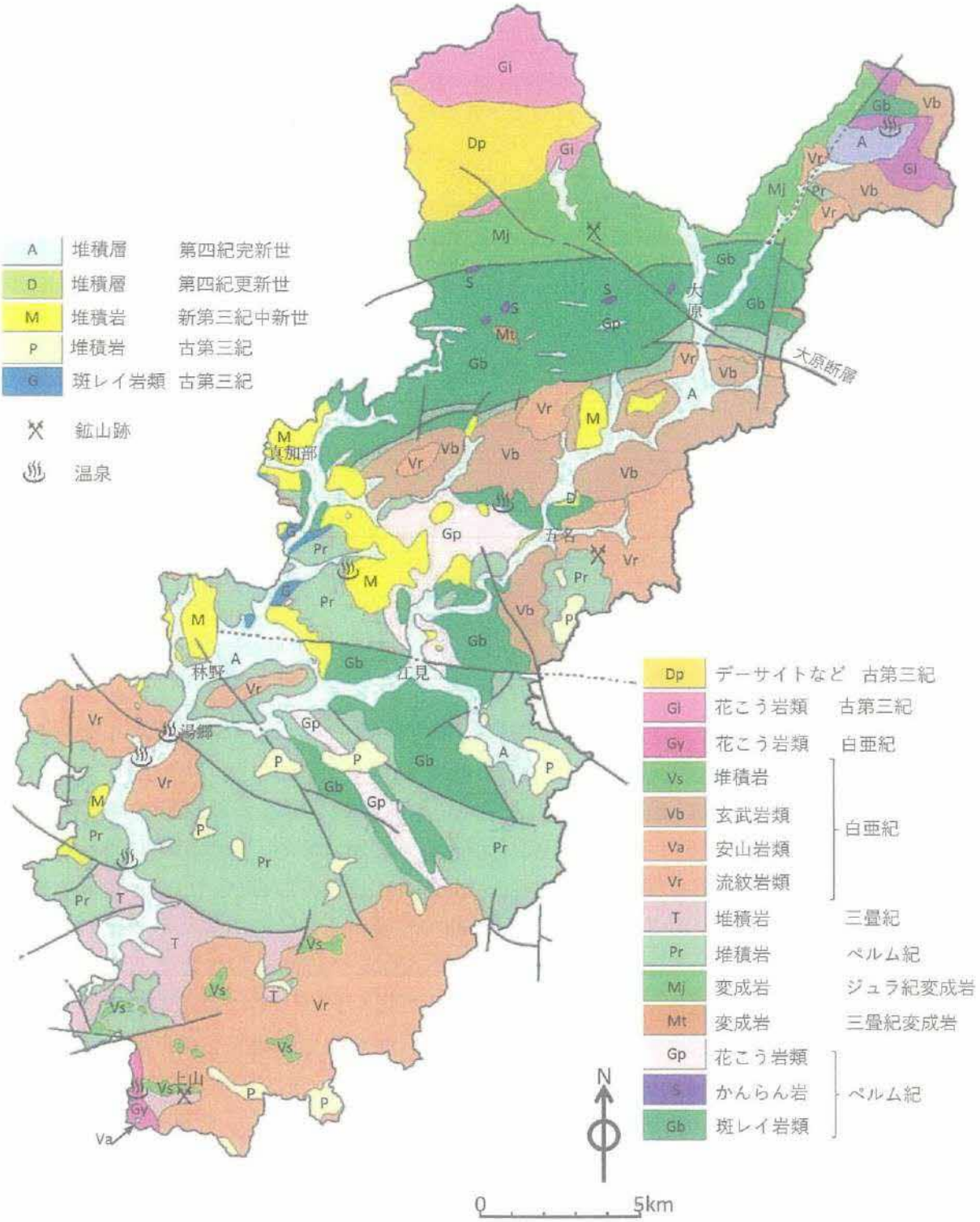

A 堆積層 第四紀完新世
D 堆積層 第四紀更新世
M 堆積岩 新第三紀中新世
P 堆積岩 古第三紀
G 斑レイ岩類 古第三紀
鉱山跡
温泉
大原断層
真加部
五名
林野
江見
湯郷
上山
Dp デーサイトなど 古第三紀
Gi 花こう岩類 古第三紀
Gy 花こう岩類 白亜紀
Vs 堆積岩
Vb 玄武岩類
Va 安山岩類
Vr 流紋岩類
白亜紀
T 堆積岩 三畳紀
Pr 堆積岩 ペルム紀
Mj 変成岩 ジュラ紀変成岩
Mt 変成岩 三畳紀変成岩
Gp 花こう岩類
S かんらん岩
Gb 斑レイ岩類
ペルム紀
N
0 5km

図7 美作市地質図

ます。多くは凝灰岩類で、火山から放出された砕屑物(火砕物)が、それ自身の熱で再結晶を起こした溶結凝灰岩となっている場所も多いです。これらは主に市の中央部から北部にかけての地域にみられます。Ｖａは東南部の妙見山付近に小岩体があります。なお、妙見山自体には、山陽帯に属する花こう岩類(Ｇｙ)がみられます。

②山陰帯火成岩類

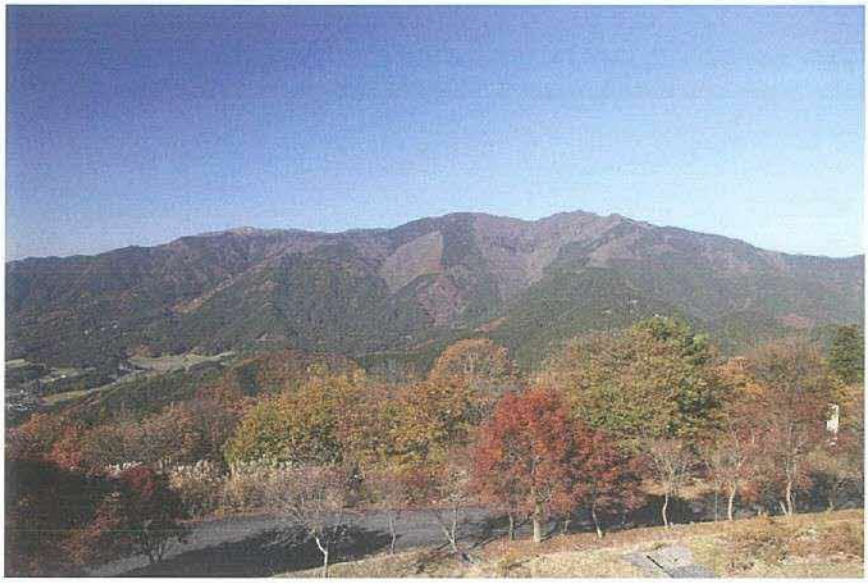


写真1 美作アルプス遠景

北部の中国山地脊梁部から鳥取県に至る地域には白亜紀後期から古第三紀にかけての花こう岩(Ｇｉ)が分布します。西南日本の花こう岩類は、その中に磁鉄鉱を多く含むか含まないかによって二分され、多いものは山陰帯花こう岩と呼ばれ、少ないものは山陽帯花こう岩と呼ばれます。このように、当地の花こう岩は山陰帯に属し磁鉄鉱を多く含むので、古くより鉄穴流しによる砂鉄の採集が行われてきました。北部の梶並川上流部には、白亜紀から古第三紀にかけてのデーサイト質な火山岩(Ｄｐ)が分布しています。これは隣接する那岐山から続いているもので、中国山地の南部の広い範囲に分布しています。磁鉄鉱を含むデーサイト質の溶岩や凝灰岩などから構成されています。

③化石産出の勝田層群

吉備高原地域には、古第三紀の堆積岩(Ｐ)が点在しています。この地層は、古くは山砂利層と呼ばれていました。固結状態が良くない礫岩からなり、化石が発見されていないことから時代未詳(岩相から第四紀更新世と推定)とされていましたが、他地域で山砂利層中に火山灰層が挟まっているのが発見され、年代測定が行われた結果、古第三紀の地層と判明し、吉備層群と命名されました。吉備層群は河川成の地層であることから、日本列島がまだ大陸から分離していない時代の、大河川の堆積物と解釈されています。市域中央部の林野周辺の丘陵には、新第三紀中新世の堆積岩類(M)が分布しています。岩石としての固結状態はやや緩く、泥岩などは容易に風化し泥化します。化石などから比較的温暖な地域の河川から浅海で形成された地層であることが示唆されています。隣接する奈義町ではビカリアという巻貝の化石が多産していることが知られていますが、美作市内でも貝などの化石産出が報告されています。この地層は勝田層群と命名されており、真加部地区には勝田層群の最下部を示唆する礫岩層(真加部礫岩層)があることから、勝田層群は、美作市中西部付近より形成が始まり、西に向かって堆積が進行していきました。吉野川や梶並川が作る谷地は、第四紀の堆積物で埋められています。市中央部の江見付近にはやや古い時代の未固結堆積物が段丘礫層として残っており(D)、年代は更新世とされています。その他の河川沿いの堆積物は完新世の

もので(A)砂礫を主体としています。

④鉱山と温泉

美作市には古い鉱山跡が非常に多く存在します。古いものとしては、南部の妙見山近傍上

写真2 慶長鉱山跡

山地区の慶長鉱山跡があります(写真２)。ここは『日本霊異記』に記載された最古の鉱山と言われ、慶長年間に盛んに採掘されました。鉱山には、三畳紀の堆積岩(Ｔ)中に位置する。妙見山の花こう岩類(Ｇｙ)の貫入によってもたらされた金属を含む熱水が、母岩の堆積岩に銀や銅を沈殿させたものです。北部の大原の北西に金谷鉱山跡があります。これも慶長年間に採掘の最盛期を迎えています。銅、鉛、亜鉛等が産出されました。鉱山はジュラ紀の変成岩(Ｍｊ)中にあります。中央部の江見付近は、小規模な鉱山が多数あり、多くは銅を採掘していました。江見の北方の五名地区に石ヶ谷の鉱山跡が残っています。地質は白亜紀の流紋岩類(Ｖｒ)ですが、坑道跡付近に花こう斑岩の岩脈が見られ、これが鉱体形成に関与しています。

美作市内には、１０か所ほどの温泉がありますが、多くは近年に掘削されたものです。湯郷温泉は美作三湯のひとつに数えられ、１,２００年前に開発された逸話が遺っています。４５０Ｌ/分の湯量があり、泉質はラジウムを含む塩化物泉です。温泉付近の地質は白亜紀の流紋岩類(Ｖｒ)でありますが、北西―南北方向の断層がこの付近を通っており、地下深部から温泉水が輸送されていることが伺えます。

(６)美作市の動植物

美作市に関する動植物の分布状況の情報を記した文献として、勝田郡勝田町(1975)、英田郡美作町(1981,2007)、大原町(2008)、作東町(1979)、英田町(1996)、東粟倉村(1979)の各町村史(誌)があります。これらの町村史誌では、地域の歴史文化について非常に詳細にまとめられていますが、自然に関する記載はごくわずかでした。その中で、東粟倉村史(1979)は後山の植物目録として９４科３１３種、後山の鳥類として１９科３３種を記録しており、貴重な記録となっています。しかし、美作市全体を網羅して動・植物に関する知見をまとめた文献は見当たりませんでした。ここでは岡山県を対象とした調査・研究の中から美作市に関するものをまとめています。

①動物

美作市に生息する大型哺乳類としては、岡山県(1989)によると、ニホンザル、ツキノワグマ、タヌキ、ホンドキツネ、アナグマ、ニホンイノシシ、ニホンジカが記録されています。

岡山県に分布が確認されている生物の中から、絶滅が危惧される生物をまとめた資料として「岡山県版レッドデータブック」があり、近年リストが更新されています(岡山県2020ａ)。最新版の岡山県版レッドデータブックの掲載種で、美作市域に生息する哺乳類としては、ツキノワグマ(絶滅危惧Ⅱ類)のみでした。岡山県内のツキノワグマは大正末期には絶滅寸前となっていましたが、保護活動の結果、個体数は増加傾向にあるとされています(岡山県2020ａ)。「岡山県生物目録」では、ツキノワグマは岡山県北部および中部に生息しているとされています(岡山県2019)。そのため、美作市は全域がツキノワグマの生息域に入っている可能性があります。

写真3 横川のムクノキ(県)

写真4 横川のムクノキ(県)

このように、美作市に生息する哺乳類としては、里地・里山に生息する、いわゆる普通種のタヌキやホンドキツネ、ニホンイノシシ、ニホンジカが広く分布し、絶滅が危惧されるツキノワグマ東中国地方個体群の分布域となっていることが特徴の一つとなっています。

②植物

「岡山県版レッドデータブック2020」によると、掲載されている維管束植物５７４種のうち、１１０種(１９.１%)が美作市に生育していることが明らかとなりました(岡山県2020ｂ)。

美作市に生育する希少種の一例をあげると、モクセイ科のシオジ(岡山県:準絶滅危惧)があります。シオジは山地の渓流周辺に生育する落葉高木であり、岡山県では美作市と西粟倉村のみに生育が確認されています(岡山県2020ｂ)。美作市にシオジが生育していることは、伐採や土地改変の行われやすい谷部において、渓谷林が残存したことが要因として大きく考えられます。

もう一例として、アカネ科のヤマトグサ(岡山県:絶滅危惧Ⅰ類)があります。ヤマトグサは、山中の樹林の林床に生える多年生草本であり、岡山県では美作市とその周辺のみに生育が記録されています。目立たない草ですが、自然下に生育する個体数は少なく危機的な状況です(岡山県2020ｂ)。ヤマトグサは、牧野富太郎が日本人として初めて学名を付けた記念すべき植物であり、日本の特産種であることが特筆されます。

写真5 後山山頂付近の植生

一方で、巨樹・巨木に目を向けてみると、美作市には岡山県指定天然記念物の横川(よこかわ)のムクノキ(臼井2004)があります(写真３・

写真6 後山のブナ群落

４)。このムクノキは樹高が約２５ｍの大木であり、圧倒的な迫力を誇っています。

③植生

山野がどのような植生で成り立っているかは、動物にとっては生息場所として重要であり、当然ながら植物にとっては生育場所そのものであり、人間の生活や文化の形成にも密接にかかわります。ここでは、美作市域における植生の概要をまとめておきます。

写真7 後山のケヤキが優占する渓谷林

植生を考える際には、その場所の標高が重要です。西日本の植生は、自然状態では、低標高域においてはシイノキやカシノキの常緑広葉樹林、高標高域はブナやミズナラの落葉広葉樹林が分布し、両者の境目は、およそ６００ｍ前後とされています(山中1979、難波・波田1997)。美作市の標高域は、東粟倉地域の標高１，３４４ｍ(後山)が最も高く、英田地域内を流れる吉野川の最下流部が最も低く約４３ｍとなっています(国土地理院ＨＰより算出)。そのため、美作市には冷温帯の落葉広葉樹林と、暖温帯の常緑広葉樹林が分布していると推定されます。

環境省の植生図(環境省ＨＰ)を参照して、美作市最高峰の後山から、後山川と吉野川の流れに沿いながら、美作市役所のある林野駅付近に至るまでの植生について概要を以下に記します。

【東粟倉地域の植生】(環境省ＨＰ 現存植生図)

写真8 後山山麓の景観

後山(図４参照)の山頂から山腹にかけては、ブナ群落(写真６)が分布しています。岡山県内においてブナの優占する自然林はごくわずかであり、西粟倉村の若杉峠(わかすぎとうげ)や、新庄村の毛無山(けなしがせん)、真庭市の上蒜山(かみひるぜん)などに残るのみです。後山の山系の南斜面の谷筋には、一部にシオジ群落とケヤキ群落が分布しています(写真７)。シオジ群落は岡山県内では後山以外にはほとんど知られておらず、貴重な存在です(岡山県1978、岡山県1988)。後山の山麓の東粟倉地域の中谷(なかたに)地区付近は畑地が多くなり、一部に水田もみられます。周囲の山地ではスギ・ヒノキの植林が非常に多くなっています(写真８)。

【大原地域の植生】(環境省ＨＰ 現存植生図)

東粟倉地域から流れ出る、後山川が吉野川に合流する大原地域付近は、周囲の山地はコナラ群落が多くみられるようになります。コナラ群落は、コナラやアベマキなどの優占する落葉樹の二次林であり、かつて薪炭材の採取など繰り返し行ってきた結果出来上がった植生です。この付近も東粟倉地域と同様に、スギ・ヒノキの植林が非常に多くなっています。

【作東地域の植生】(環境省ＨＰ 現存植生図)

大原地域から吉野川の流れに沿って、作東地域を下っていくと、吉野川に沿って水田があり、のどかな田園風景が広がっています。一方で、山地には所々にゴルフ場が開発され、森林を蚕食する芝地が目立っています。森林の植生としては、相変わらずコナラ群落とスギ・ヒノキ植林が

多いですが、尾根や山頂の地形には、アカマツ群落がみられます(写真10)。アカマツ群落は、岡山県内の二次植生としては代表的なものですが、松枯れ病の蔓延により面積を減らしています。

【美作地域の植生】(環境省ＨＰ 現存植生図 真加部)

作東地域から、吉野川を梶並川の合流点まで下り、現在の美作市役所のある美作地域付近を見てみると、川沿いの沖積平野には市街地が広範囲に広がり、水田や畑地など耕作地としての利用は少なくなっています。周囲の山地を見ると、コナラ群落、アカマツ群落、スギ・ヒノキ植林がほとんどを占めるのは、作東地域の地域と変わりませんが、植生図上では、ひとつひとつの群落が小さくモザイク状に入り乱れていることが読み取れます。この傾向は、鎌倉台地付近で顕著であり、山野を人間が長い年月をかけて積極的に利用した結果、細やかな土地利用区分が生まれ、このような景観となったと考えられます。

写真9 吉野川沿いの平野と水田

写真10 美作市内のアカマツ林

④植生の変遷

美作市の地域は、梶並川が吉野川に合流する林野の町並みを中心に発展し、美作と備前西大寺を高瀬舟が結び、その船運で賑わった地域です(美作市2007)。一方で、歴史ある地域ということは、古くから多くの人々が居住し、その生活のために多量の薪炭材が必要とされたはずです(波田1999)。人々は日常の煮炊きに用いる薪や炭のほかに、牛馬の飼料や田畑の肥料とする枝葉などを、生活域の周辺の野山から採取していました。そのため、昔から栄えていた地域の周辺の山林は、手つかずの自然はほとんど残っていないことが多いものです。

美作市においては、集落の周辺や、吉野川・梶並川、その支流周辺の山地はコナラ群落が最も多く、次いでアカマツ群落が広がっています。これらは、繰り返し森林伐採を行った結果に形成された植生であり、人々に長く利用されてきたことがわかります。また、スギ・ヒノキ植林も広大な面積があることから、山が木材生産の場として管理されてきた側面も非常に強いといえます。

このように、美作市の植生の特徴は、岡山県最高峰である後山周辺に貴重な自然植生を残しながらも、大部分は人間が生活に利用し、人工植林と、いわゆる里山とよばれる二次植生が大部分を占めるとまとめられます。その森林の様相は昭和15(1940)年以降、大きく変化していますが、(太田ほか2013)、現在の森林植生の変化を植生遷移として捉えれば、大まかには森林を盛んに伐採していた時代から回復する傾向にあるとも捉えられます。近年では、太陽光発電所の開発のため、山地を大規模に改変して太陽光パネルを並べた景観が作り出されるなど新たな変遷が始まっています。

【出典】

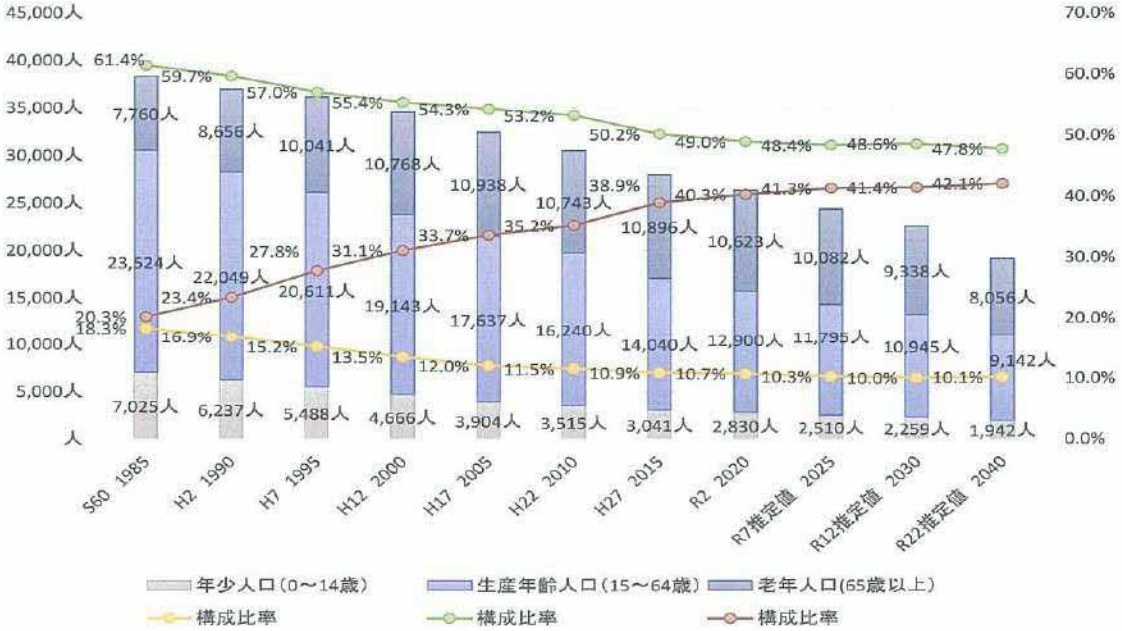
・自然環境調査Ｗｅｂ-ＧＩＳ-生物多様性センター(環境省 自然環境局)
(http://gis.biodic.go.jp/webgis/index.html)

1-2 社会的状況

(1)人口

美作市の人口は、平成１７(2005)年の美作市発足時には３２,４７９人でしたが、令和５(2023)年には２５，６６８人(令和５年７月３１日現在）と１８年間で６，８１１人減少し、減少率は２０．９％となります。令和２２(2040)年には、美作市の人口は２０，０００人を切って１９，１４０人になるとの予想がされています。美作市発足以前の平成７(1995)年から平成２７(2015)年の年齢3区分別の人口では、年少人口は５,４８８人(構成比率１５．２％）から３,０４１人(構成比率１０.９％)へ、生産年齢人口は、２０,６１１人(構成比率５７％)から１４,０４０人(構成比率５０.２％)と、人数、構成比率ともに大きく下がっています。一方で老年人口は、１０,０４１人(構成比率２７.８％)から１０,８９６人(構成比率３８.９％)と人数は微増ですが、構成比率が大きく増加しています。以上のことから美作市の少子高齢化が進んでいることが分かります。

表3 年齢別人口の推移(資料:国勢調査、人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」)



(2)産業

美作市は、湯郷温泉を中心とした観光業をおもな産業としてきました。平成２７(2015)年の産業別就業者数においても、全就業者数が１３,６９０人で、第１次産業就業者数１,９７２人(構成比１４.６％)、第２次産業就業者数４,０７８人(構成比３０.１％)、第３次産業就業者数７,４９３人(構成比５５.３％)と観光業を含む第３次産業が主な産業となっています。

①林業

市域(４２,９２９ｈａ)の約７７％である３２,９３６ｈａを森林が占めており、森林のうち約４５％が人工林となっています。近年では収益性の低下などにより経営体数も昭和５５(1980)年の５,４６４経営体から、平成２７(2015)年には９７２経営体と約1/6となっています。

②観光

本市を支える中核産業で、冒頭の湯郷温泉を中心に多くの観光客が訪れています。大芦高原温泉「雲海」や「現代玩具博物館・オルゴール館」など他の観光施設などを含めると年間１３０万人以上の観光客が美作市を訪れています。

③農業

美作市を含む岡山県北東部では、一時期の作付面積が日本一となった「黒大豆」が盛んに栽培されています。品種名を「作州黒」と名付けてブランド化し、県下一の生産量を誇る「海田茶」と合わせ特産としています。また、日指ゴボウや万善かぶらなど伝統野菜もブランド化が検討されています。一方で農家数は減少し、耕作放棄地が増加しています。

表4 就業人数推移(国勢調査)

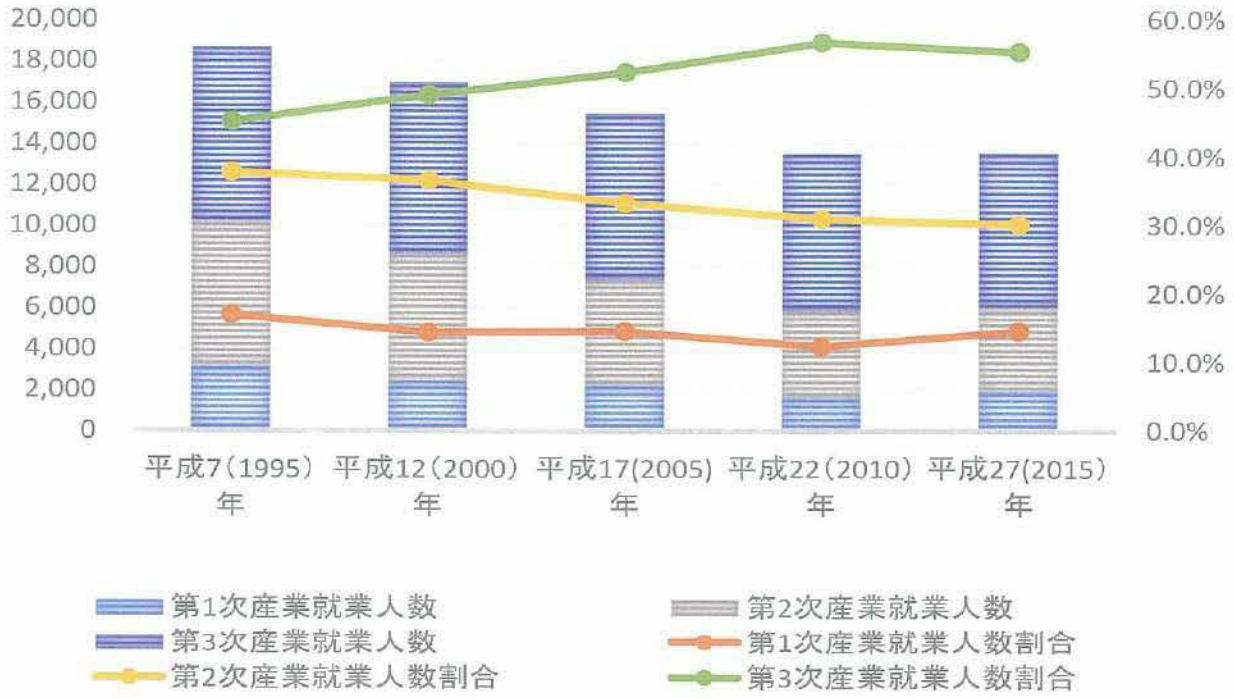


表5 観光施設観光客数(岡山県観光客動態調査報告書)

施設名	H26	H27	H28	H29	H30
湯郷温泉	893,000	1,059,000	873,000	847,000	819,000
湯郷鷺湯温泉	195,361	200,280	197,341	198,451	185,695
現代玩具博物館・オルゴール夢館	18,054	34,149	30,397	30,049	31,806
武蔵資料館	8,291	8,209	6,422	5,645	4,982
クアガーデン武蔵の里	45,622	46,410	43,243	-	-
武蔵の里五輪坊	6,326	5,809	6,106	4,267	4,796
作東バレンタインホテル	28,292	29,800	26,589	26,718	23,588
岡山国際サーキット	327,000	305,000	288,000	267,000	233,000
大芦高原温泉雲海	4,683	5,925	5,337	5,477	14,514
大芦高原	586	633	-	1,205	3,407
津谷キャンプ場	2,208	2,185	1,665	1,336	1,416
コテージ村	3,275	3,385	607	2,637	2,614
	1,532,698	1,700,785	1,478,707	1,389,785	1,324,818

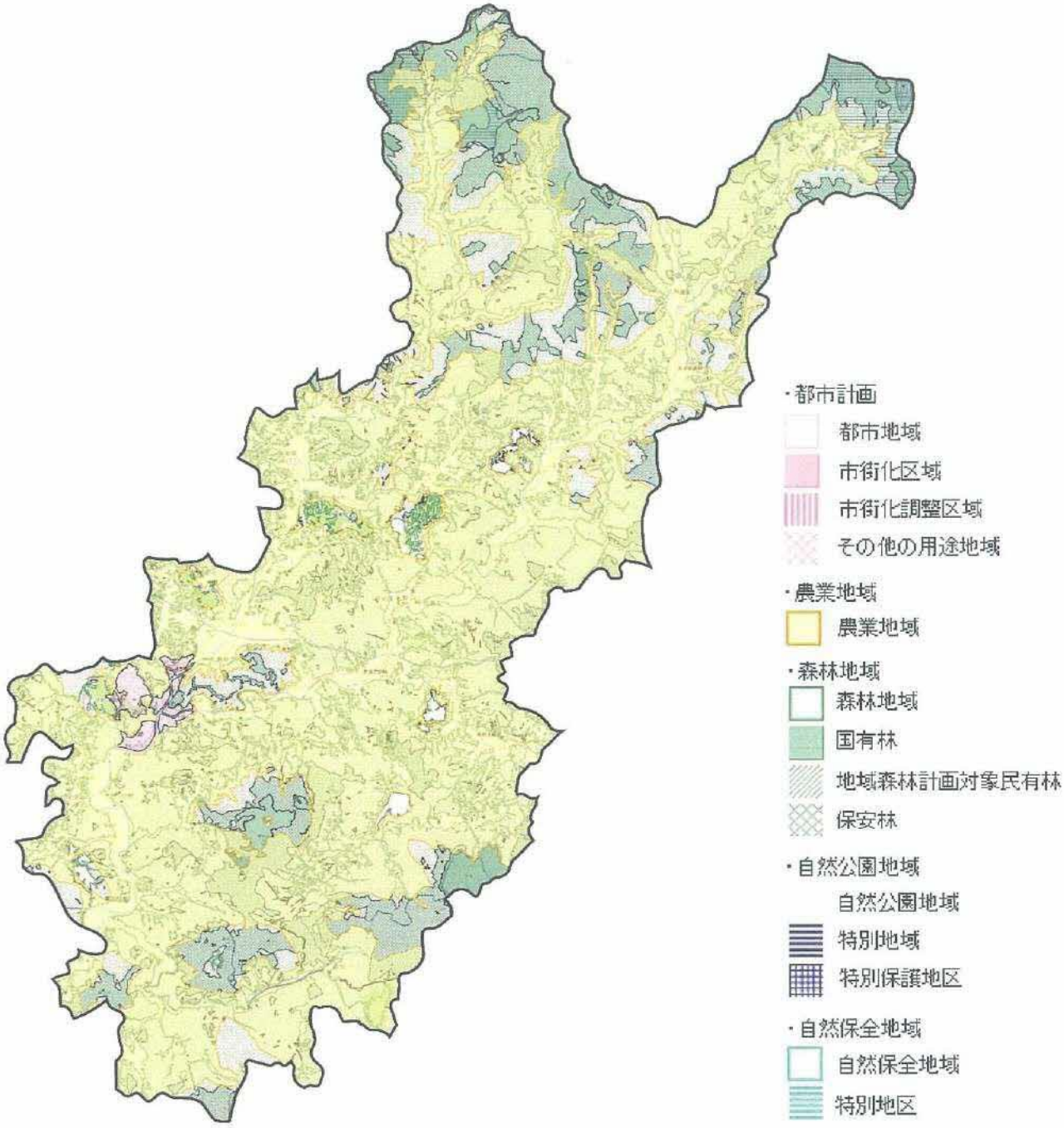


図8 美作市土地利用図

（３）土地利用

岡山県の東北部に位置する美作市の面積は４２９．２９ｋ㎡で、岡山県の約６％を占めています。市域北部は中国山地に続く１，０００ｍ級の山々が連なり、南部は吉備高原で５０ｍ～５００ｍの丘陵台地です。市域の南北に吉野川と梶並川が走り、田畑や集落は両河川に沿って形成されています。市域の約８割が森林や原野が占めています。土地利用は山林５３．４％、宅地２．３％や田畑９．７％、原野１．５％、雑種地等やその他が３３．１％となっています。

「美作市都市計画マスタープラン」（平成２２(2010)年）では、平成１７(2005)年の美作市発足以前の旧町村の中心地を「６つの拠点」として設定し、拠点それぞれが連携し交流しています。また広域交通網や公共交通により市外との広域交流をし、市内での連携と市外との連携である「２つの連携」と「６つの拠点」を核としたまちづくりを進めています。

（4）交通

本市には、古くは出雲街道と因幡街道がそれぞれ東西、南北に走っていました。現在は、街道に沿ってそれぞれ中国自動車道（中国縦貫自動車道）、鳥取自動車道（中国横断自動車道）の高規格幹線道路が走っており、広域的な交流を可能としています。近年は、中国自動車道から岡山県南部への地域高規格道路である美作岡山自動車道の建設が進んでおり、ますます交通の利便性向上が期待されています。また鉄道においても市内には、ＪＲ姫新線、智頭急行智頭線が高規格幹線道路と同様にかつての街道に沿って敷設され、鉄道の駅舎は街道の宿駅付近と地域の中心部に設けられています。

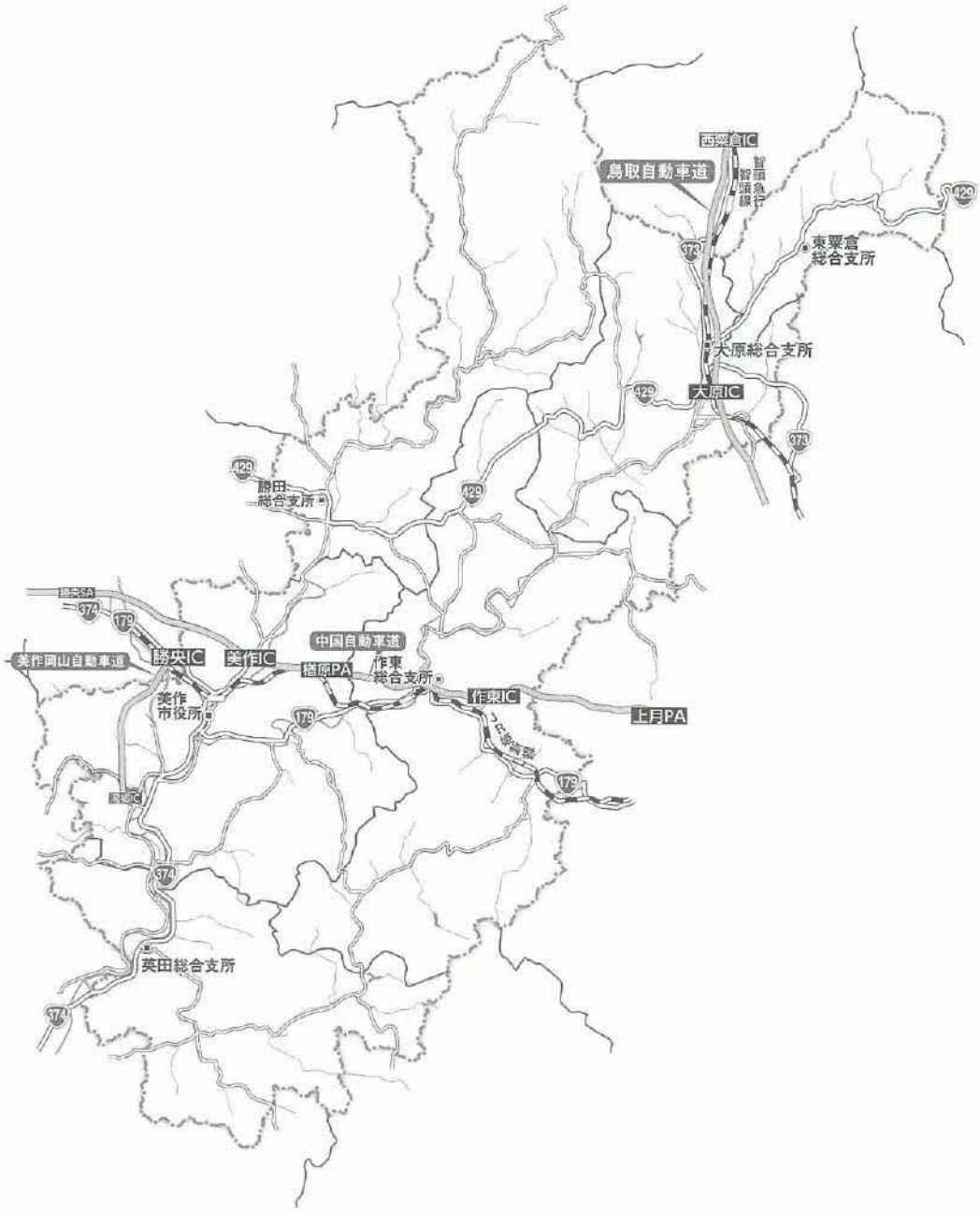


図9 美作市内交通網

1-3 歴史的変遷

（１）先史時代（縄文時代～古墳時代）

旧石器時代は、土器は作らず、主に打製石器で狩猟や植物の採集を行い、食料を得ていました。おおよそ３５，０００年前から１５，０００年前のことです。

美作地方では、真庭市の蒜山高原や鏡野町の恩原高原で多く確認されていますが、市内では、現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていません。

写真11 尾崎遺跡（古町）出土神子柴系石器
（岡山県古代吉備文化財センター提供）

縄文時代の人々が生活した痕跡が市内に現れます。１５，０００年前に始まった縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分けられます。市内では草創期に属する神子柴系石器が尾崎遺跡（古町）で見つかっています。住居跡など定住を示す遺構はありませんが、石器の出土が市内に人が足を踏み入れた痕跡となります。定住の痕跡としては、縄文時代後期の石ヶ坪遺跡（真加部）まで下ります。

弥生時代には、稲作農耕により人々は安定した生活を手に入れ、人口が大幅に増えます。弥生時代は早期・前期・中期・後期・終末期に分けられ、２，３００年から１，８００年前です。本市で確認された遺跡の多くは小高い位置に築かれた集落跡となります（鎌倉山遺跡（豊国原）、八幡山遺跡（古町）、高本遺跡（川北）など）。水田跡は発見されていませんが、石包丁など収穫道具が見つかっていることから、穀物を栽培していたと考えられます。弥生時代の終わりから古墳時代には、地域の有力者が墳丘墓や古墳と呼ばれる大きな墓に埋葬されるようになり、弥生時代の終わりには勝田天山弥生墳丘墓（河内・杉原）や鍛冶屋逧遺跡周溝墓（上相）が築かれます。

続く１，７００年前から始まる古墳時代に入ると、全長４５ｍの前方後円墳である河合古墳（久賀）が築かれ、続いて楢原下に全長５２ｍの市内最大の古墳である前方後方墳の寺山１号墳（【市】楢原下）が築かれます。大型の古墳は河川交通の要衝と考えられる場所や平野を望む尾根上や丘陵に築かれます。

写真12 野寺山古墳出土陶棺
（ColBase（https://colbase.nich.go.jp/））

古墳時代も時代が下ると川戸古墳（【市】川戸）や豊野１号墳（【市】豊野）など横穴式石室を持った古墳が出現します。さらに時代が下ると小規模な古墳が大幅に増えます。同時に、古墳時代の美作市を含む美作地方の特徴のひとつである陶器の棺が野寺山古墳（【市】（平福）、桶木古墳（三保原）、丹摩古墳（下倉敷）など市内の古墳にも多く使用されています。陶棺は、美作地方の特徴で全国の出土点数の約半数が確認されています。中でも野寺山古墳出土の陶棺には、仏教の影響を受けたと考えられる文様が施されたもので、野寺山古墳が築かれた時期には、美作地域にも仏教の教えが導入されたと考えられます。美作地方の特徴の一つである製鉄については、下坂遺跡（位田）で古墳時代後期の製鉄炉跡が製炭窯を伴った形で確認されています。

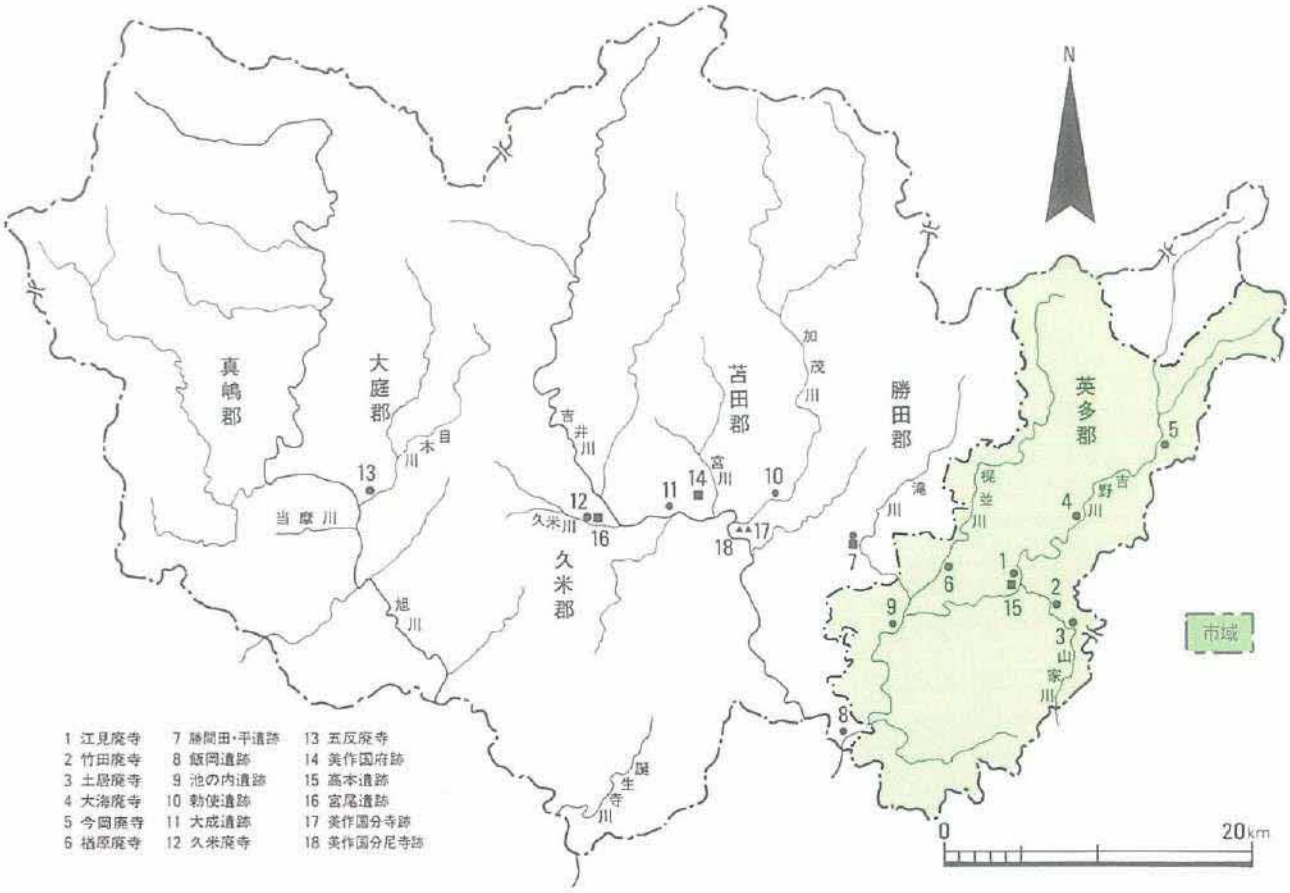


図10 美作地方の白鳳寺院関連遺跡分布図 （津山郷土博物館「美作の白鳳寺院」1992一部改変）

（2）古代（奈良時代～平安時代）

古代は、奈良時代から平安時代の終わる約５００年間です。美作市は、和銅６（713）年に備前の国から分かれて成立した美作国を構成する郡である英多郡と勝田郡の一部から成り立ちます。高本遺跡（川北）や今岡遺跡（今岡）では、それぞれ「郡」、「讃」の墨書土器が出土しています。このことから高本遺跡は古代英多郡衙に関連する遺跡、今岡遺跡は遺跡が所在する郷名の「讃甘郷」の官衙と考えられています。

美作市市内の土居、竹田、江見、大海、今岡、楢原の６か所には白鳳寺院が建立されました。美作地方の古代寺院は１３か所確認されていますが、英多郡に６つの白鳳寺院が集中し、県下では珍しいケースで美作市の特徴の一つです。

さらに、美作市の特徴の一つに鉄があります。平城宮から出土した木簡に「美作国英多郡大野里鉄一連」や「英多里鈹」などが記されています。大野里は現在の美作市大野地区で、英多里は市内とされています。鈹は鉄製農具で、古代の美作市では鉄や鉄製品を税として朝廷に納めていました。市内では、製鉄の際に発生する鉄滓も数多く地表面で採集されています。また日本最古の仏教説話集『日本霊異記』には、英多郡の鉄鉱山を舞台とする説話が掲載され、『日本霊異記』が編纂された平安時代には、英多郡で鉄が豊富に採れることが認知されていた証拠と考えられます。

その他市内には、「吉」の印面をもつ銅印【市】（地蔵の上遺跡（平福））、全国的にも珍しい文様を持つ緑釉陶器（尾崎遺跡（古町））、円面硯（尾崎遺跡（古町）、水の奥遺跡（福本）などが出土しており、寺院の他にも文字を扱う階層の人々が存在したと考えられます。

（３）中世（鎌倉時代～安土桃山時代）

鎌倉時代に入ると、幕府の支配を全国的に広げるため、安東氏、渋谷氏などの東国武士が地頭として赴任してきますが（西遷御家人）、新たな統治者と中央勢力に近い寺院や貴族が所有する市内の荘園との間に土地を巡るトラブルが発生していたことが古文書等（『吾妻鑑』、安東家文書等）でわかっています。一方で塩湯郷（湯郷）の地頭職の後藤氏は、永享５（1433）年の江戸時代に筆写「美作国塩湯郷地頭職掟条々（赤堀充則家文書）」で、１１か条の掟を定め、うち２か条は温泉支配に関する内容を記しており、後藤氏の温泉支配への並々ならぬ決意がみえます。

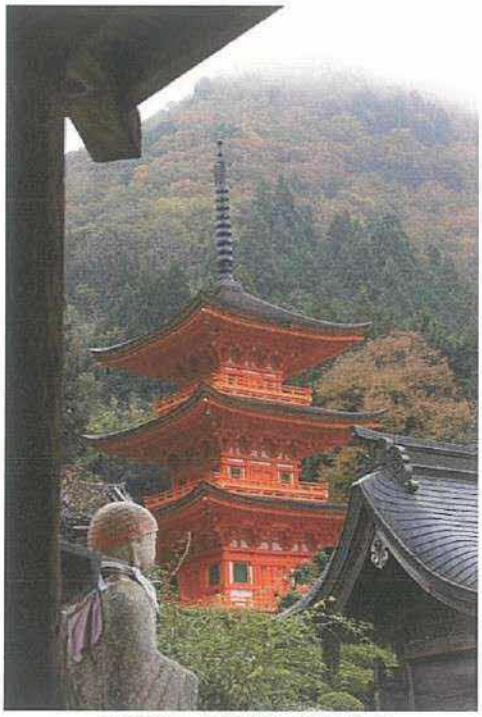


写真13　長福寺三重塔【国】

武士による統治を不満とした後鳥羽上皇は、承久３（1221）年に承久の乱をおこしますが、鎌倉幕府により鎮圧され隠岐の島に流されます。その約１００年後には後醍醐天皇によって、鎌倉幕府討幕を狙った元弘の乱（元弘元（1331）年）を起こしますが、鎮圧されて後鳥羽上皇同様に隠岐の島に流されます。配流は出雲街道を利用したとされ、杉坂峠をはじめ後鳥羽上皇、後醍醐天皇の足跡が多く伝承として多く遺っています。

室町時代になると、美作国は播磨国の赤松氏が守護となり領国を治めるようになります。しかし、南北朝に分かれて続く争乱の中、赤松氏に対抗して山陰地方で勢力を持つ山名氏も守護を与えられ、両者の争いが続くようになりました。

応仁の乱（応仁元（1467）年～文明９（1477）年）の後、１６世紀（1501～1600）に入っても赤松氏と山名氏の争乱は終わりませんでした。赤松氏と山名氏に加えて、出雲国の尼子氏や播磨国・備前国の浦上氏、備前国の宇喜多氏らが、美作国の支配を巡って激しい争いを続けました。

市内には８４か所の居館や山城があり、中世の美作国で激しい戦いが繰り広げられたこと窺えます。これは決して周辺からやってきていた武将だけが活動していたのではなく、三星城跡（【市】明見）を拠点とした後藤氏や、竹山城跡（【市】下町）を拠点とした新免氏ら市内に地盤を持つ武将や国衆たちをも活躍していたことを物語っています。後藤氏は天正７（1579）年に備前国一円を支配していた宇喜多直家により滅ぼされ、宇喜多氏に従って戦国時代を生き抜いた新免氏は、慶長５（1600）年の関ケ原合戦で宇喜多氏が滅びた後は、福岡藩黒田家に仕官していきました。

武士による戦乱の中、真木山頂に僧坊２２坊を数えた（吉岡正雄家文書、『新訂作陽誌』）長福寺では、現存する岡山県下最古の木造建造物として三重塔【国】（真神）は、棟札から鎌倉時代（弘安８（1285）年）に建てられたことがわかっています。また長福寺の僧侶や寺男によって槙山茶が栽培されていました。

岡山県下最高峰の後山には、僧徹雲によって道仙寺が建てられ、戦国時代には、毛利家や宇喜多家といった戦国大名の庇護を受け修験道の行場として多くの山伏が訪れました（「後山霊験記」）。

（４）近世（江戸時代）

江戸時代に入ると森家が津山城を中心に美作国を治めましたが、元禄１０（1697）年に後継ぎ

がいないため、幕府により津山藩が召し上げられると、市内は幕府領、または他国の藩領の飛地として、分断支配が明治維新まで続きます。出雲街道や因幡街道が参勤交代によって整備され、街道には宿駅が設置されました。市内には、出雲街道の宿駅として土居宿に本陣、脇本陣がおかれ、播磨への国越え前の宿駅として栄えました。また鳥取藩池田家が利用する因幡街道においても、大原宿に本陣、脇本陣がおかれ、今も本陣、脇本陣が遺り往時の姿を伺うことができます。街道による物流に加え、高瀬舟による河川物流も吉野川、梶並川で盛んに行われました。林野地区は戦国時代の永禄８(1565)年には「倉敷」と呼ばれていたことが古文書(『武家聞伝記』)でわかっています。年貢米の積み出しなどがあり、また綿花や茶の栽培などによる物流の集散地として林野地区には蔵が並び栄えました。その他の産業では、ろくろを用いて木製品を作る木地師が梶並地区を中心に活動し、隣国である鳥取藩からは新たな産業振興のため誘致されたことが古文書等(『東中国山地木地師の世界』)でわかっています。後山では、鉱山運営者によるたたら吹製鉄が盛んに行われ、天明６(1786)年に建てられた林家住宅(【国】中谷)もたたら吹製鉄を運営した家でした。紙の産地として海田紙、小川紙のほか、真殿地区、五名地区など市内各地で生産されていました。また市内の沼田藩領を挙げて製茶が推奨され(「黒田家日記」、「田中家文書」)、明治以降の海田茶につながります。

写真14　大原宿古町の町並み

写真15　林家住宅主屋【国】

梶並地区の梶並神社の当人祭(【県】梶並)は江戸時代に始まったとされます。当人祭は独特な神事のため類似した祭りは見当たりませんが、その他市内の神事や娯楽など古くから交流のあった兵庫県の播磨地域の生活文化の影響を受けたことが伝わっています。神事では天曳神社宮原獅子舞(【県】宮原)に代表される市内の獅子舞、娯楽では特に地下歌舞伎が村々で盛んに行われ、美作町の地下芝居【県】や粟井春日歌舞伎(【市】粟井中)など東美作地域を代表する伝統芸能として発展していきます。また、たたら吹製鉄が行われていた後山は、修験道の行場として多くの山伏が訪れました。市内にも山上講が盛んに行われました。

文政の非人騒動(文政８(1825)年)や慶応二年騒動(十丁谷騒動)(慶応２(1866)年、鶴田藩騒動(慶応４(1868)年～明治３(1870)年)など農民による幕府への訴えが続きました。また尊王攘夷のため倒幕を掲げた若い志士も登場しますが、戦いの中で命を落とす者もあり、その慰霊碑が土居地区に建てられています。

(５)近代

明治に入ると廃藩置県では、市内は幕府領や藩領が入り乱れていたため、引き続き他県の飛

び地となりましたが、明治４(1871)年、美作国一円が北条県になり、明治９(1876)年には岡山県に編入され、ほぼ現在の岡山県となりました。明治６(1873)年には徴兵令への不満を契機に明治政府への反発として、農民が中心となって、「血税一揆」が全国で起こりました。特に美作地方では熾烈な運動となり、戸長宅や被差別部落が農民の襲撃を受けました。明治政府は近代国家建設へ向けて殖産興業を推し進め、美作市内においても産業の育成や交通網の整備等を進めました。特に美作地方では養蚕が推奨され、県の後押しや有志による取組により製糸業が盛んとなり、市内にも製糸会社が多く設立されました。後山を代表する市内のたたら吹製鉄は、洋式製鉄がとって代わり衰退していきますが、一方で日清・日露戦争などによる金属需要の高まりにより市内各地に鉱山(主に銅鉱)が開かれ採掘されました。明治の終わりから大正の初めには、姫路から津山を結ぶ播美鉄道敷設計画が立ち上がり、美作東部の富豪である豊福氏が私財を投げ打って取り組みましたがとん挫し、その後新たに姫路と新見を結ぶ姫新線の計画が立ち上がり、昭和１１(1936)年に開通します。また、岡山県南部には、柵原鉱山で採掘された鉄鉱の輸送を目的に柵原から備前片上港までの片上鉄道が大正１２(1923)年に敷設されました。姫新線や片上鉄道の運行に合わせ乗合自動車なども運行され、高瀬舟は次第に衰退していきます。

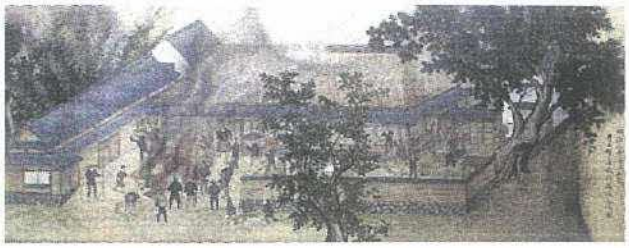


図11 血税一揆絵図(美作町史資料編Ⅲより転載)

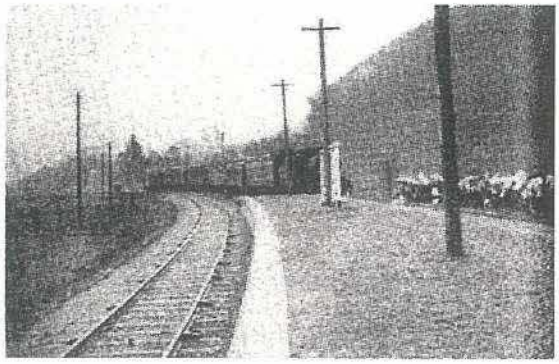


写真16 昭和9(1934)年 姫津線(津山駅～林野駅)開通

近代化が進み、世界との距離が短くなりましたが、同時に世界恐慌や世界的な戦争へ突き進むなど世界の動きが人々の生活に大きな影響を及ぼしていきます。戦時中は金属不足から寺院の梵鐘の供出、弾薬庫の設置(入田)などがなされ、また疎開先として多くの人々を受け入れました。昭和１０(1935)年には、市内の宮本を出生地とした「宮本武蔵」が吉川英治によって新聞掲載され、圧倒的な人気を博し、世間に宮本武蔵生誕地として認知されるようになりました。

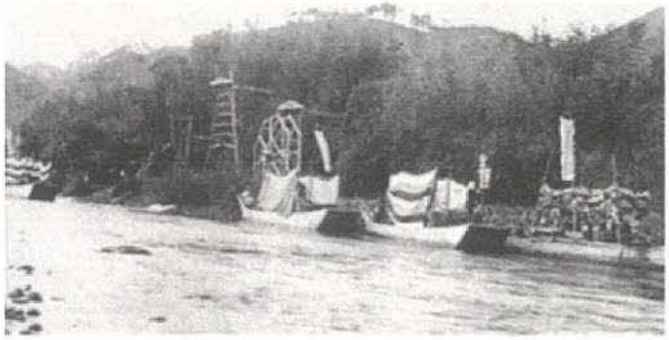


写真17 湯瀬を上る高瀬舟(美作町史写真編より転載)

(６)現代

昭和２０(1945)年の終戦後、戦後の復興から高度経済成長へ時代は移り、昭和の大合併が市内の旧町村でも行われ、美作市発足以前の旧町村が生まれます。昭和４０年代(1965～1974)には中国自動車道(中国縦貫自動車道)が開通し、昭和４１(1966)年に湯郷温泉に国民宿舎みまさか荘がオープンしました。昭和６３(1988)年には、瀬戸大橋が開通に伴い瀬戸大橋需要を見込んだ観光客誘致のため、旧町村それぞれに公営の宿泊施設がオープンしました。平成２(1990)年にはＦＩＡ(国際自動車連盟)公認サーキットであるＴＩサーキット英田(現「岡山国際サーキット」)(滝宮)がオープンし、平成６(1994)、７(1995)年にはＦ１グランプリが開催されました。平成６(1994) 年には鳥取県と京阪神をつなぐ智頭急行が開業し、「宮本武蔵」大河ドラマ化と交通網の整備と相まって、湯郷温泉をはじめとする市内観光地がにぎわいを見せました。

平成の市町村合併においては、平成１３(2001)年に岡山県から、西粟倉村、東粟倉村、大原町、作東町、美作町、英田町の英田郡での組み合わせが基本的な組み合わせとして提案されました。その後平成１７(2005)年３月３１日に英田郡の大部分(東粟倉村・大原町・作東町・美作町・英田町)と勝田郡の一部(勝田町)が市町村合併し、美作市が発足しました。

(7)市域の変遷

勝田町・東粟倉村・大原町・作東町・美作町・英田町の６か町村が平成１７(2005)年の合併により一つの市となり、現在の美作市が誕生しました。過去をさかのぼると、勝田町・東粟倉村・大原町・作東町・美作町・英田町は、昭和２８(1953)～３１(1956)年に明治期頃の村が合併して形成されました。

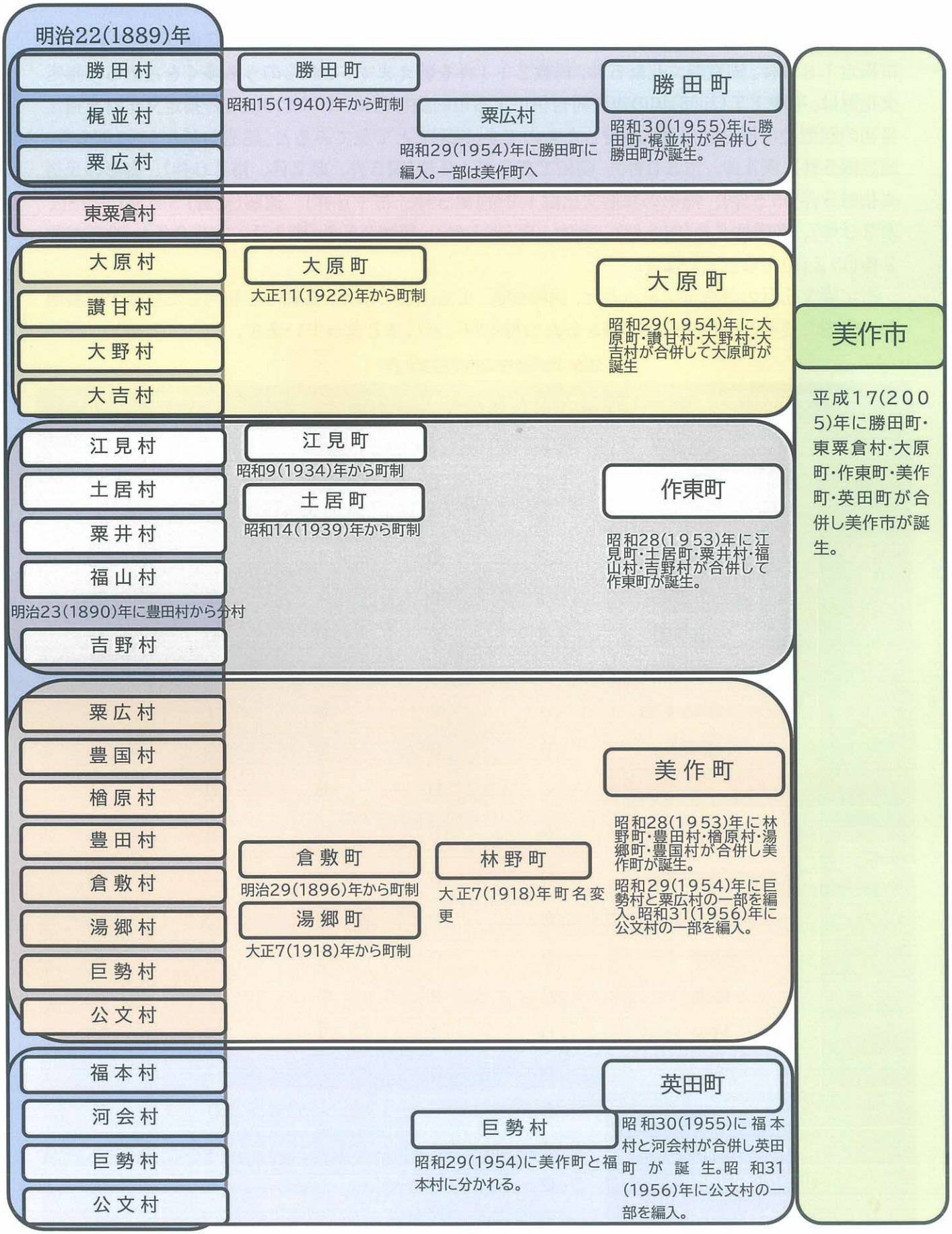


図12 美作市域の変遷